

昭和 58 年度 総括研究報告書

班長 小 林 登（東京大学医学部小児科）

母子関係，父子関係，家族基盤さらに育児問題などに関し，学際的な研究を行うことにより，母子相互作用の臨床応用上の意義を明らかにするとともに家庭保健の在り方を解明することを目的として初年度の研究を行った。

本年度は産科学，小児科学，精神科学，耳鼻咽喉科学，心理学，教育学，育児学，行動科学，文化人類学，看護学，工学などの領域から 58 名の専門家に研究協力者としての参加を求め，次の 6 項目の研究プロジェクトを組み，研究に着手した。

プロジェクト I

動物行動学的研究：サル，チンパンジーなどの哺乳動物における母子関係

プロジェクト II

周産期医学的研究：胎児・新生児における母子関係

プロジェクト III

発達心理学，行動科学的研究：乳幼児の心理・行動の発達と母子・父子関係，さらに集団保育の在り方の研究

プロジェクト IV

小児科学・臨床心理学的研究：小児心身症暴力行為など，行動異常と親子関係，および心身障害児における親子関係の研究

プロジェクト V

社会小児科学，文化人類学的研究：親子関係，家庭基盤および集団保育の在り方を社会小児科学さらに文化人類学的な立場から研究する。

プロジェクト VI

育児・家庭基盤などの実態に関する調査・疫学的研究：育児，保育の実態，おしおき症候群，おきざり赤ちゃん症候群などを対象として実態調査を行う。

各研究協力者の研究計画ならびに本年度の研究成果については添付する報告書に述べるところであるが，2 回にわたる研究班総会において，その成果が発表され，検討が加えられた。その結果母子相互作用の臨床的意義は極めて大きいことが明らかになり，またその臨床応用として，出生直後の母子接触や未熟児に対する早期かつ頻回の親子接触，障害児に対する親子関係などの面で，社会一般が母子相互作用を考慮した対応を示すようになってくるといふ成果も認められた。

胎児や新生児が優れた能力を有することも種々の研究手段により解明され，動物における母子関係の研究から人間の母子関係に関しても極めて示唆に富む所見が得られた。

このように 6 つのプロジェクトに分かれ，母子相互作用の臨床応用に関する研究をそれぞれの専門の立場から研究しているが，各専門家が各々の立場に立ちながら共通の場で討論し，総合的に問題を解明するという本研究班の目的は十分に果たされ成果があげられ，次年度以降の研究の成果が期待される。